車いすマーク貼付全国第一号は仙台三越店をご存知？

私が勤務していた元職場の元メディカルソーシャルワーカー（ＭＳＷ）が先月末に急逝し、今日その偲ぶ会へ。

４０年前、ＭＳＷ（当時、この職種の専門性すら理解されていなかった）として外科治療後退院する患者の相談に乗っても、障害者は在宅・職場で過ごすことが出来ない社会状況だっただけに、「自分は何の相談に乗っているのか？」との思いから、退職して元患者の青年３名と一軒家を借りて、殆ど何の施策・制度のない中で、今の身体障害者用グループホームであり、作業所のような先駆的活動を始めた方でした。私が就職した頃は、その活動を始めた頃でもあり、福祉面等々色んな面で教えを受けました。

そうした活動が、重度障害者収容授産施設－ワークキャンパス－に繋がり、更に福祉工場設立に繋がりました。また、活動を支援していた学生ボランティアと、街中に障害者が出易いようにと、車道と歩道の段差をなくすスロープ鉄板購入の募金活動をリード、更に、障害者用のトイレがないために、公共施設、デパート等のトイレ設置への運動もリードした方でした。それが全国の障害者生活圏拡張運動になり、その成果の先駆けとして、車いすシンボルマークがトイレ入り口に全国で初めて貼付されたのが仙台三越店であり、後の「福祉のまち作り」、今のバリアフリー法等に繋がったことを知る人は、もう殆どいないでしょうね。

正に、彼女は今の社会の障害者の在宅福祉施策、市民運動としてのボランティア活動の種を蒔いた方でした。

その初期の辛苦も知らずに、制度があるのが当たり前、制度を充実するのは行政側の責任という、他人任せ的な今の風潮、また、言葉だけのボランティア活動を、彼女は晩年どう見つめていたのか……。

こうした方は、現状維持、体制維持では満足されないだけに、新しい試みに次々チャレンジして、色んな地方・職場を転々……。そうした無理が困じたのか、晩年は体調を崩され入退院を繰り返していたよう。数年前にお会いした時は、若い頃の思い出話を彼女のトレードマークである笑顔一杯に談笑した。

中国の言葉に「井戸の水を飲む時は、その井戸を掘った人のことを思うように」とあるが、正に、彼女は、井戸を掘った人であった。さすが彼女！黎明期、創成期のことをきめ細かく冊子にまとめていた。

ご冥福を祈ると共に、改めて冊子に目に通して、その遺志を少しでも継げればと思う。

（2004 年 12 月 23 日　記）